

「ダーマー」 (הַמָּדָר)

思い巡らすときに見えてきたもの

はじめに

主は大いなる方。大いにほめたたえられるべき方。

主の聖なる山 私たちの神の都で。

高嶺の麗しさは 全地の喜び。 北の端なるシオンの山は大王の都。

神はその都の宮殿で ご自分を砦として示された。

(詩篇48篇1～3節 新改訳2017)

シオンを巡り その周りを歩け。その塔を数えよ。

その城壁に心を留めよ。その宮殿を巡り歩け。

後の時代に語り伝えるために。 (詩篇48篇12～13節 新改訳2017)

旧約聖書で「都」「神の都」といえば、それはシオン、すなわちエルサレムを指しています。この詩篇48篇には、その神の都シオンにある壮大な神のご臨在が描かれていますが、この神のご臨在の中で、この詩篇48篇の作者は何に心を留め、何を思い巡らしたのでしょうか。

1、 神の都で何が起こるのか？

(1) 詩篇48篇3節

神はその都の宮殿で ご自分を砦として示された。

砦とは、「高きやぐら」(口語訳)、「やぐら」(新改訳改訂第3版)、「砦の塔」(新共同訳)とも訳されているように、高くそびえたつ塔であり安全な逃げ場です。神がそのような方として都の宮殿でご自分を表してくださると言っています。

(2) 詩篇48篇4節～7節

見よ 王たちは集ってともどもにやって来た。

彼らは 見ると驚き おじ惑い 慌てた。

その場で震えが彼らをとらえた。 子を産むときのような激しい痛みが。

東風によって あなたはタルシシュの船を砕かれる。

・東風 (רוּחַ קָרִים ルーアッハ・カーディーム) によって

聖書の引照箇所として、エレミヤ18章17節(「東風のように、わたしは彼らを敵の前で散らす。」)が挙げられていますが、東風といえばすべてを焼き、枯らす自然の風という脅威として幾度も使われています。この東風が起こされるというのです。

・タルシシュの船を砕かれる

タルシシュ (תַּרְשִׁישׁ) は、旧約聖書中35か所で使われており、すべてこの世の繁栄、あるいは異邦の地を表す言葉となっています。預言者ヨナが神の御顔を避けて行こうとしたのがこのタルシシュでした。そのような神の御顔を避けさせる力を「砕かれる」とはつきりと述べられています。

(3) 詩篇48篇8節

私たちは聞いたとおりに見た。万軍の主の都、私たちの神の都で。

神は都をとこしえに堅く立てられる。

・堅く立てられる (בִּינָה クーン)

בִּינָה は旧約聖書中、実に220か所も使われている言葉で、初出は創世記41章32節の、パロの夢をヨセフが解き明かして語る場面で、「神が定められた」ことを行おうとしておられるというところで使われています。

神の御前にしっかりと立たせてくださる、確固とした不動の者としてくださるという言葉です。そのように、神の都をしかもとこしえに、確立してくださるという約束がもう実現しているかのように預言的に記されています。しかも、「聞いたとおりに見た」とすでに起こったことであるとして書かれています。

2. 神の都で見たものは？

(1) 詩篇 48 篇 9 節

堅く立てられたその神の都で、詩篇の作者は

「私たちはあなたの宮の中で あなたの恵み (רַחֲמֵיךָ) を思いました (הִתְחַלְּמֵיךָ)。」(9 節)
と告白しています。このところのほかの訳を比較してみると、

[新改訳改訂第 3 版] あなたの恵みを思い巡らしました。

[口語訳] あなたのいつくしみを思いました。

[新共同訳] あなたの慈しみを思い描く。

となっています。この「ダーマー」(הִתְחַלְּמֵיךָ)は初出が民数記 33 章 5 6 節で、神がカナンの地に入る直前の民に告げられた言葉であり、神が「しようと思うことをする」と述べられた箇所が使われていますが、元は「似る、考える、比べる、なぞらえる」といった意味を持っています。

神の都の中にある神殿・神の宮で思い巡らしたものは

あなたの恵み (רַחֲמֵיךָ)

であったと作者は告白しています。

ああ、神はそのお約束の通りのことを神の都に、イスラエルにしてくださったのだと、神の約束は本当だった！、真実だった！という、神の「ヘセド」(חֶסֶד)を思い巡らし見つめていたのです。神のご計画を知っている者にとって、人間の歴史を貫いて最後までかわらない神の恵み「ヘセド」(חֶסֶד)が、確かなものであることを思い巡らしていたのです。

(2) 「ヘセド」(חֶסֶד)

主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。

主に感謝せよ。その恵み (רַחֲמֵיךָ) はとこしえまで。

(詩篇 106 : 1、107 : 1、118 : 1、118 : 29、136 : 1)

何度も詩篇のなかでうたわれた神の恵み、「ヘセド」(חֶסֶד)は、ヘブル語の本来の用法としては「契約の両当事者が互いに他方に対して守るべき忠誠と誠実の態度をあらわすこと」にあります。愛と誠実をあらわすこの言葉が神に用いられるとき、「確かな愛」、「確固とした愛」、「ゆるぎない愛」を意味しており、しかも「万軍の主の熱心」といわれるよ

うに、「神の確かな愛の持つ力、その堅固さ、執拗さ、堅い固着」を伝えるには単に「恵み」や「いつくしみ」と訳すだけではこの言葉の持つ意味を伝えるには弱い（「牧師の書齋」より）といえる「ヘセド」（חֶסֶד）、この神の愛について思い巡らしていた詩篇48篇の作者が、約束の通りに表された神の愛を見たのです。

この愛を思うとき、ひとりひとりの人生に表される恵みも、そして民族的な救いをもたらす聖書の語るイスラエルの歴史を貫く神の恵みも、まことに驚きに満ちており、「あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（イザヤ43章4節）と言ってくれる神の、神の民への愛の徹底していること、ゆるぎないことに感謝しかありません。

その愛をすみからすみまで「ダーマー」（דָּמָר）思い巡らしていた詩人の見たエルサレムは、まさに「神の都」であり「聖なる山」「全地の喜び」「大王の都」「都の宮殿」であったのです。その都が「堅く立てられる」イスラエルの回復について、はっきりと見て預言的に語られているといえます。

おわりに

「後の時代に語り伝える」（詩篇48篇13節）ために「シオンを巡り その周りを歩け」（12節）とこの詩人が言っているように、その霊性をもってイスラエルの地を訪れる巡礼者は今も数多く起こされています。イエシュアの足跡をたどり、その恵みを思い巡らし、神のご計画・その御業を驚きをもって見つめる人々は、ある意味、神にそのように召されているともいえるのではないのでしょうか。

この詩篇48篇はイスラエルを再び立て上げる預言であり、1948年のイスラエル建国を正確に歌っていると、みことばのひとつひとつから明らかにしている方々もいます。とこしえに変わらない神の約束、神の恵み「ヘセド」（חֶסֶד）、イスラエルへの神の特別な選びの愛を思い巡らすとき、私たちの目には混沌としている現代の様相も神のご計画の中にあることだと気づかされます。常に神のヴィジョンは何なのかを見て、神のみこころを悟りたいと願ってやみません。

2018年9月24日 松原小百合